様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年　６ 月　９ 日現在

機関番号：３２６９９
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2017～2022
課題番号：１７Ｋ０２５５１

研究課題名（和文）アメリカン・キャラクターの伝播と出版界―孤立主義的レトリックの継承

研究課題名（英文）Dissemination of American Character and Publishing: Rhetoric of Progressive Isolationism

研究代表者
佐久間　みかよ（SAKUMA, MIKAYO）

学習院女子大学・国際文化交流学部・教授

研究者番号：００３２７１８１

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,500,000円

研究成果の概要（和文）：19世紀アメリカ文学にあらわれる人物像の特徴である自由で孤立したキャラクターは、アメリカの外交政策であった孤立主義とジャーナリズムの発展とが影響して創造されたことを明らかにした。19世紀中ごろの領土拡張期には、拡大に対する不安がコスモポリタン的要素として表象されたが、この動きは20世紀の多文化社会に至るまで周縁化されていた捩れを指摘した。この成果を、学会発表（国内、海外）7 回と、研究成果物として単著『個から群衆へーーアメリカ国民文学の鼓動』（春風社、2020年）、編著『改革が作ったアメリカーー初期アメリカ研究の展開』（小鳥遊書房、2023年）として出版した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
民主主義の国アメリカの国民性の形成に関して、文学作品を通じて、外交政策である孤立主義とジャーナリズムの発達が影響を与え、19世紀後半の拡張主義がさら変化を加え、コスモポリタニズム的要素があらわれる過程を指摘した。本研究の学術的意義は、アメリカ文学史の再考がすすむなか、多文化的視点によるアメリカニズムを考える際、自由と孤立を特徴とするアメリカ人像の修正的継承としてアメリカ型コスモポリタニズムを考察する必要性を提示したところにあると考える。

研究成果の概要（英文）：This research delves into the formation of American characters, which were memorized as independent and solitary persons, mainly in the nineteenth-century writings in relation to American foreign policy of isolationism and the rise of American journalism. However, some of American characters were transformed into the person of cosmopolitanism against the territorial expansion, but these characters have been neglected and marginalized until the twentieth century. This study raises the problem of the complicated situation of isolationism and cosmopolitanism. As the result of the study, seven papers were read in both national and international conventions and two books have been published: From Person to People:the Revolution of American National Literature (2020) and Rethinking Early America: Peoples, Reforms, and Writings in Perspective(2023).

研究分野：アメリカ文学

キーワード：アメリカン・ルネサンス　孤立主義　ハーマン・メルヴィル　マーク・トウェイン　ピューリタン　出版界　コスモポリタン

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

2017 年当初、アメリカ民主主義を再考する研究が発表されていたが、本研究はこの動向に着目するところから始まった。19 世紀中頃成立したとされるアメリカ国民文学の特色に民主主義の文学という要素があるからだ。アメリカの民主主義をどう捉えるかは、アメリカ文学におけるキャラクター像を考察する際にも重要な観点と考える。歴史研究においても民主主義国家を導いたアメリカ独立革命を建国者たち中心の共和主義的解釈から多様な成立へとパラダイムシフトが起きている。こうした研究と合わせ、クロッペンバーグの『民主主義に向けて』（2016）は、アメリカ民主主義の成立をヨーロッパの啓蒙思想からどのように発展したかを環大西洋的に見直す視点を提供している。クロッペンバーグの指摘の中でも、アメリカ独立革命に際して、イギリスの政治思想家たちが、アメリカの民主主義に危惧を持ちつつ、憧憬も感じていたことを指摘したことに着眼した。この指摘は、文学研究において情動に注目した研究と関連づけられる視点を持っており、また、アメリカ文学史の見直しにおけるトランスナショナルなアメリカ文学研究の進展とも関連づけられるものであった。

アメリカに対するヨーロッパからの視線に含まれる愛憎半ばする、相反する要素を考慮し、それに対するアメリカの反応を研究するという環大西洋的トランス・ナショナルな研究の重要性の高まりがあったと言える。クロッペンバーグを嚆矢として、民主主義国家の文学としてのアメリカ文学を研究する上で、上記の二つの研究動向、一つは、情動に注目した研究、もう一つはトランスナショナルな研究を参照枠とした。

情動面の研究で新たな視点として注目すべきは、アフェクト論を取り入れたシアン・ンガイの『醜い感情』（2013）において、嫉妬など否定的な感情のもたらす情動に注目した文学研究である。身体経験から発する情動の動きに注目することで、身体と情動の複雑な関係性が明らかになり、これまで見過ごしてきたネガティブな反応にみられる身体的経験の重要性に着目する視点を得ることができた。

トランスナショナルな研究から、従来の F. O.マシーセンのアメリカン・ルネサンス期の作家たちをキャノンとする文学史に再考が加えられ、空間的、時間的に広範囲に視野を広げた研究が進んでいる。ワイ・チー・ディモックは、2001 年の ALH の論文で「ディープ・タイム」というキーワードのもとに、アメリカ文学の起源をかつて射程に入っていなかった時間や地域を考慮に入れることで、例えばイスラムにもその起源を求めるなど、多様な文学として再評価しようと提唱した。さらに、ポール・ジャイルズの『アメリカ文学のグローバル・リマッピング』(2015)、アンナ・ブリックハウスの『脱アメリカ的文学空間と 19 世紀公共圏』（2004）において、これまで孤立主義的政策からアメリカン・アイデンティティの形成が国内において行われるとするアメリカ例外主義の思考を脱却し、アメリカを環大西洋的・環太平洋的視点において見直し、また南北アメリカを視野にしたアメリカ文学の再考が可能になった。

また、一方で民主主義の進展を考察する際に、看過できない研究分野がある。アメリカにおける出版事情の研究である。エドワード・ウィドマーの『ヤング・アメリカ』(1999)、メレディス・マギルの『アメリカ文学と再版文化』(2007)らの先行研究から、19 世紀ジャーナリズムが政治的な面で文学に与えた影響が明らかになった。とりわけ、ウィドマーの研究は、民主主義国家アメリカの拡大を是とする世論形成に、ニューヨークのジャーナリズムが大きな役割を果たしたことを明らかにした。ウィドマーの研究は、ニューヨークを中心に活動したヤング・アメリカ運動の盛衰を論じることで、アメリカのジャーナリズムにおける地域的特性に留意した研究をすすめるものであった。

これまでアメリカの外交政策を反映した孤立主義的傾向が、19 世紀アメリカ作家の作品における孤立する人物像に与えた影響を研究してきた。その研究を発展させるため、19 世紀における領土拡大と民主主義の変容の研究、アメリカ文学そのものの射程を再考する研究、また孤立に含まれる情動的要素の先行研究が展開している状況にあった。

２．研究の目的

モンロー・ドクトリンによる外交政策である孤立主義がアメリカ人の特性に影響を与え孤立主義的人物像が、19 世紀アメリカ文学にあらわれることについて研究を行ってきた。その蓄積の上に、孤立主義的キャラクターが、19 世紀中頃領土的に拡大しているアメリカにおいてどのように変容していくか、トランスナショナルな視点を加え、情動的側面を作品において着目することで、民主主義の成熟とアメリカ人像の変容を研究することを目的とした。

その際、アメリカ人像の伝播に大きな役割を果たしていくジャーナリズムとの関連もみていく。急速に発展する出版界が作家とどのような関わりを持ったか、またそのことにより、アメリカン・キャラクターが生成されていくプロセスに変化が生じていくのか研究することを目的とした。

３．研究の方法

本研究は以下の３つの観点に留意して行っていった。

１　アメリカン・キャラクターの分析――アメリカ国民文学が成立する 19 世紀中頃のキャラクターを中心に分析し、その特徴である孤立主義的傾向に内包されていた要素を研究した。アメリ

カン・ルネサンス期の作家として、ラルフ・ウォルドー・エマソン、ハーマン・メルヴィル、それに続く世代のマーク・トウェインを中心に行った。これらの作家たちの描くアメリカン・キャラクターがどのような特徴があり、それぞれの差異についての考察を行った。また、同時代的要素だけでなく、こうしたキャラクターができる背景として歴史的に俯瞰し、植民地時代から 20 世紀まで可能な限り垂直的な分析も加えた。

２　出版界と作家の分析―19 世紀半ばを中心として、作家と出版社の関係を精査していった。当時台頭するニューヨーク・ジャーナリズムと植民地以来出版の中心であったボストンとの拮抗する関係から、ジャーナリズムが作家に与えた影響を考察した。出版界を通じて、作家の作り出したキャラクターに含まれるアメリカ像が、翻案されて流通されていく様を研究することで、アダプテーション分析につながる要素にも着手した。

３　トランスナショナルな観点での見直しーーアメリカン・キャラクターの生成について、孤立主義的レトリックが生んだ孤高のキャラクター像をトランスアトランティック、あるいはトランスパシフックな観点で捉え直し、ヨーロッパとの関係、また中南米との関係からどのような影響があったかを精査した。歴史的な孤立が内向きなアイデンティティを国民に作ったとするアメリカ例外主義に対して、領土拡張期を迎えた 19 世紀中ごろでは、拡張主義に対する不安と対抗がどのように表象されたか考察した。

４．研究成果

トランスナショナルな視点から考察するに際し、海洋をテーマにするセッションを企画し、米国 PAMLA 学会のパネルとしてアクセプトされた。アメリカ東海岸の学者とハワイ在住の学者、日本人学者とパネルを組んで、海洋と島嶼をテーマにディスカションすることができた。太平洋の島から見たアメリカ、また、海洋国家としてのアメリカという新たな視点を得ることができ、トランスアトランティクな関係性が、トランスパシフックな関係性へとずらされながら、二つの大洋に挟まれた国家としてのアメリカ合衆国の位置とそこから生まれる国家イメージ、そしてキャラクターにつながる着想を得た。この研究成果を、マーク・トウェインとハーマン・メルヴィルのハワイに関する論文としてまとめ、拡大するアメリカに対する危惧を描くメルヴィル、拡大傾向を既定のものとして見ているトウェインの違いから、アメリカ型の帝国主義の進展について時期により微妙に移り変わる領土と国民の意識の違いとして指摘した。メルヴィルがハワイを訪れたのは 1843 年、トウェインがハワイの地を踏んだのは 1866 年、この 20 年の違いは、ハワイに対する作家の視点の違いとなって現れていた。メルヴィルは、アメリカの帝国主義的萌芽と捉えていたが、トウェインはこの傾向をむしろ規定のものとしている。そして二人に共通することは宣教師への疑念であった。宣教活動と植民地活動の同期は、カトリック国で行われていたが、プロテスタント国アメリカに於いても、太平洋上の島嶼でなされていたのであり、領土拡大のパターンとして見ることができる。宗教的要素が、民主主義の進展と重なりながらもずれつつ領土拡大となっていたことを示していた。この論考を単行本の１章としてまとめ発表した。

ジャーナリズムとの関連の研究では、ジャーナリズムとシアトリカティの研究を行い、米国 PAMLA,NeMLA の国際学会で発表を行った。エマソンの講演とその報道から、エマソンの持つ思想のみならず、キャラクターが伝播する様を精査し、作家とジャーナリズムの関係性について研究を行った。これは、ニューヨーク・ジャーナリズムが作り出した西漸運動を是とするキャッチコピーとなった「マニフェスト・デスティニー」とエマソンの反応についての研究に発展した。ヨーロッパ的な生きるとは何かを求める思考と、エマソンが求める如何に生きるかの違いを明らかにし、西部への拡大によって、アメリカ国民は、アメリカとは何かではなく、アメリカは如何に成り立つかという方法論を求めていく方向性を指摘した。エマソンの論考は単行本の１章にまとめた。

メルヴィルに焦点をあてた研究では、看過されがちなメルヴィルの後期の詩を考察した。メルヴィル後期の詩群のなかには、当時のイタリア統一に興味をもち、イタリア統一運動の立役者ガリバルディを登場させた作品群「パルテノ―プ」がある。この詩群には、ニューヨークのプライベート・クラブでのイタリア絵画の話、またガリバルディの統一運動の様子などが盛り込まれ、メルヴィルのヨーロッパ旅行の際の体験を生かし、また、当時のアメリカにおける南北の対立が激化する様子が陰画として描かれたものと解釈できる。アメリカの南北対立と対照的に進むイタリア統一運動に対して、連邦維持を望むメルヴィルは興味を抱いていた。また、南部の文化についてもメルヴィルの美学的観点での憧憬とそのルーツとしてのヨーロッパ文化への関心は強いものがある。アメリカの拡大に対して、懸念を感じていたメルヴィルが今までになくヨーロッパを題材として用いたのは、アメリカに対する考え方を、国内的なものだけでなく、国際的にとらえようとしている証左といえる。とりわけ、メルヴィルの場合、南部に対するシンパシーを感じていることが指摘されており、メルヴィルはアメリカ文化を一枚岩的なものと捉えておらず、メルヴィル自身の南部文化への理解と憧憬が感じられるものとなっている。メルヴィルの南部に対する見方には、イタリアを通した南ヨーロッパへの憧憬とも解釈しうる点について指摘し、日本アメリカ文学会東京支部においては発表をおこなった。これは、トランスアトランティックな視点でアメリカを見直そうとする見方にもつながるものであり、アメリカ南部という地域を通じて、アメリカのとらえ方に国際的要素が加わったものといえる。アメリカの地域を対ヨーロッパの文脈で捉え直す見方は、モンロー・ドクトリン以来の外交政策が反映した孤立主義的な国民性の考え方から、一歩踏み出したものといえる。近年批判されるアメリカ例外主義の根幹にあるアメリカの国民性を自国のなかだけで完結させようとする傾向からの脱却がコスモポリタン

的人物としてあらわれていると解釈できよう。
　地域性の問題を考察するために、トウェインの西部と東部に対する意識を考察した。東部の大御所詩人ヘンリー・ワズワース・ロングフェローの生誕７０周年記念パーティにおいて、エマソンを登場人物とし、西部における詩の受容をコミカルに述べた、トウェインのスピーチに着目した。トウェインの意図は理解されず、以後彼はこのスピーチを大失敗と記憶することになった。このスピーチは、当時のジャーナリズで影響力をもっていた『アトランティック・マンスリー』誌の編集長であったウイリアム･ディーン･ハウエルズの依頼によるものであり､ハウエルズは、東部文壇の前で、トウェインによるスピーチによって当時勃興しようとしている西部文化の粋を伝播しようとしたのかもしれない。しかし、トウェインは、その意図を取り違えたのか、東部文人エマソンと西部の炭坑夫の会話を描き、コミカルな人間性を描こうとした。エマソンと名乗る一行が、西部の片田舎の宿屋に泊まり、大酒を飲んで騒ぎながら、自らの詩を披露するというものである。ニセ文人に対応する坑夫は､権威に惑わされない現実感を持つ人物として描かれる。その時のエマソンたちの詩は、場違いな歌でしかなく、対照としてあるはずの西部で生まれた詩の存在をトウェインは示唆しようとしていた。アメリカ詩の発展は小説と比べ遅れていたとはいえ、当時西部では、リアリスティックな詩が生まれていた状況をトウェインは把握していたといえる。「マニフェスト・デスティニー」として開拓が進んでいく西部では、東部にない文化が生まれていた。ここに登場する坑夫は、新たなアメリカン人像が形成されていた証左である。
　こうしたアメリカ国内における人物像の多様化は、多文化の経験、または出自を持つ作家たちの試みとなってあらわれる。その一例として、アイルランド人の父、ギリシア人の母を持ち、アイルランド、イングランド、アメリカ、カリブ海諸島、日本で暮らしたラフカディオ・ハーンに注目した。ハーンは、文筆活動をアメリカのジャーナリズムとの接点から始めた。その後、フランス語圏マルチニク、日本と様々な言語圏で暮らしながら、英語で作品を発表した。彼はそうした体験から、また、片目が不自由であったことも要因か、音に敏感な作品を書いていく。マルチニクでの超自然的作品、日本での怪談などには、言語を超えた音による共感の世界が描かれる。アメリカ性に国際感覚が上乗せされたキャラクターが出来上がっていくといえよう。こうしたコスモポリタン的人物像をメルヴィルの描く人物像と対比し、論集にまとめた。
　これまでの研究を通じて、西部への発展による国内のキャラクターの多様化、そしてトランスアトランティック、およびトランスパシフィクな活動からうまれるコスモポリタン的要素が加味されたアメリカン・キャラクターが生成する様を追っていくことができた。そこで、クロノロジカルな流れを遡行して、植民地時代のアメリカに対する見方を研究のまとめとしておこなった。注目したのは、第二世代のピューリタン、サミュエル・シューワルである。シューワルは、マサチューセッツ湾植民地の裁判官として活躍する一方､義父の商売を引き継ぎ､イングランド、中南米の地とも交易をおこなうビジネスマンであった。シューワルで興味深いところは、平信徒でありながら、千年王国論ともいえる文書を残した点である。ここでは、千年王国が始まる場所を遠く離れたメキシコ・シティとし、メキシコの先住民を改宗する必要性を述べている。シューワルは、ボストンの警護官としての任務にもついており、先住民の襲撃に備える毎日を送っていた。先住民の改宗は、北のフランス、南のスペインのカトリック勢力を考えると、急務と思われたのかもしれない。メキシコへの宣教を頭に入れていたシューワルの地政学は、その後のアメリカ合衆国へと引き継がれ、テキサス併合から米西戦争へと連なっていくともいえる。「一本の蝋燭」（ブラッドフォード）、「丘の上の町」（ウィンスロップ）などのレトリックに象徴されるアメリカ例外主義的なイメージとは対照的な、国際関係の中で拡大するイメージが植民地時代からすでに懐胎されていたといえる。この点に関して、『改革が生んだアメリカーー初期アメリカ研究の展開』に収録された「シューワルのメキシコ幻想」にまとめた。
　上記研究成果を２冊の書籍、単著『個から群衆へーーアメリカ国民文学の鼓動』(春風社、2020年)、編集代表『改革が作ったアメリカーー初期アメリカ研究の展開』(小鳥遊書房、2023)としてまとめることができた。
　『個から群衆へーーアメリカ国民文学の鼓動』においては、アメリカン・キャラクターの要素として「移動」をあげ、アメリカ国民文学を民主主義の文学と捉えることで、アメリカン・キャラクターの推移を考察する構成とした。移動を生み出すことになった要因を時間軸に沿って、「丘の上の町」、「リバイバル」、「コミュニティ」、「パフォーマンス」、「戦死者」、「首都」、「パラダイス」、「聖地巡礼」、「コスコポリタン」、「ボーダーランド」の 10 のキーワードを設定し、このキーワードに含まれるレトリックを分析した。その際、それぞれの特徴を表すキャラクターを生み出した作家、作品の背景に注目した。「丘の上の町」では、植民地時代マサチューセッツ湾植民地の牧師、トマス・シェパードをとりあげ、シェーパードがアメリカの地で教区となる町づくりをする際に行った説教の特徴、土地分配に対する考え方、出版文化との関わりを考察し、内省を重んじるリベラル中流階層のモラルが形成された様を論じた。「リバイバル」においては、宗教復興運動の立役者と言われるジョナサン・エドワーズを取り上げ、アメリカ人のイメージにある２面性、合理性と信仰心の強さの原型を探った。「コミュニティ」では、ナサニエル・ホーソーンが自身の実験農場での体験をもとにして書いた『ブライズデイル・ロマンス』の女性主人公ゼノビアと彼女を巡る視線から、雄弁に語ろうとする女性とそれを抑えようとするジェンダー規範のせめぎ合いを表しており、女性のアメリカン・キャラクターを取り巻くコミュニティの問題について考察した。「パフォーマンス」は、アメリカの知識人の代表と言えるラルフ・ウォルドー・エマソンの西部への講演旅行を取り上げ、講演というパフォーマンスがジャーナリズム

を通じてエマソンのキャラクターを作り出していく様を辿った。アメリカの新しい地域西部を見ることが、エマソンにアメリカの問題を認識させることになり、一方で新しい聴衆たちにエマソンのキャラクターを印象づけていったのである。「戦死者」では、南北戦争を詩に描いたメルヴィルは、小説家から詩人へと変容し、南北戦争における死者に共感し、南部への温情を訴えたことに注目した。詩人メルヴィルというキャラクターを通して、分裂から統合へと向かおうとするのに必要な喪の作業と言える。「首都」というキーワードでは、マーク・トウェインの作品（チャールズ・ダトリー・ウォーナーとの合作）『金メッキ時代』を取り上げた。首都ワシントンという都市のキャラクターが惹きつける人物像を考察することで、投機に翻弄された人々のアメリカン・ドリームが醒めた瞬間を描き、資本主義の矛盾を指摘したものと解釈できる。「パラダイス」では、「マニフェスト・デスティニー」による西への開拓が海を超えた領土としてアメリカに加わることになるハワイの描かれ方を、メルヴィル、トウェインの記述から考察した。パラダイスとしての太平洋上の諸島ハワイは、アメリカの帝国化が進んでいく対象であったが、帝国アメリカの姿が隠蔽されつつ、アメリカ化する様をメルヴィル、トウェインの作品は捉えていた。「聖地巡礼」は、メルヴィルが行った地中海・中近東への旅が、聖地巡礼をする若者を中心とした物語詩としてまとまった『クラレル』を分析したものである。中東の地での動物描写から、自然との一体感を描くメルヴィルには、アメリカの外部を体験した上でのコスモポリタン的萌芽が伺える。「コスモポリタン」では、19 世紀後半から登場するコスモポリタン的人物が 20 世紀に展開していった例として、黒人知識人 W.E.B.デュボイスを取り上げた。コスモポリタンとしてのデュボイスの作品からは、アメリカ南部の問題を世界的に捉えるようとする姿勢が伺えた。「ボーダーランド」では、チカーナ作家のサンドラ・シスネロスの短編集において、アメリカとメキシコの国境付近で起こっていることを分析し、境界を超えて移動する女性たちのキャラクター像を考察し、私的空間と公空間を行きする女性たちの問題と期待が描かれることを指摘した。

この書籍をまとめたことから以下のことが提示できたと考える。アメリカン・キャラクターを考察する 10 のキーワードから、その特徴が移動にあることを浮き彫りにした。この移動は、個人の小さな動きがやがてうねりを作っていく過程であり、拡大ではなく深化するもの、つまり、アメリカン・キャラクターは移動により新しい要素を装いつつ成長していく国民という集合の様であると特徴づけられた。

研究の締めくくりとして、また、今後の研究の展望を示すために、タイムスパンを長くとり、初期アメリカ研究を見直すこととした。初期アメリカの成り立ちを振り返るために、論集『改革が作ったアメリカーー初期アメリカ研究の展望』を編著者としてまとめた。各論文は初期アメリカの姿を再考するテーマを論じたものを集めた。佐久間は、サミュエル・シューワルという植民第二世代のピューリタンが持つメキシコへの視線の背景にあるものを考察し、イギリスからアメリカへの移動を経験したシューワルは、遥か南のメキシコへの宣教を射程に入れた地政学的認識を持っていたことを明らかにした。このことから、アメリカ人がもつ世界観が植民地時代に遡ると、境界や言語を超えていくコスモポリタニズムが内包されていたという仮定を導いた。

これらの研究の結果、アメリカの孤立主義の更新として創造されたアメリカン・キャラクターが内包していたコスモポリタン的要素をその定義も含め再考することで、多文化アメリカの持つ可能性を考察する研究への展望が得られた。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計4件（うち査読付論文　2件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　1件）

１．著者名 佐久間　みかよ	４．巻 ー
２．論文標題 トウェインが読むエマソンの詩―ホイッティア誕生70周年祝賀スピーチを巡って	５．発行年 2022年
３．雑誌名 マーク・トウェイン 研究と批評	６．最初と最後の頁 ー
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 Mikayo Sakuma	４．巻 第22号
２．論文標題 Biographies and the American Renaissance	５．発行年 2020年
３．雑誌名 学習院女子大学紀要	６．最初と最後の頁 37-48
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 佐久間　みかよ	４．巻 18
２．論文標題 揺れ動くトウェインのハワイ表象ー島嶼から考えるアメリカ	５．発行年 2019年
３．雑誌名 マーク・トウェイン研究と批評	６．最初と最後の頁 14－24
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 佐久間　みかよ	４．巻 43
２．論文標題 ソローの「市民の反抗」と孤立主義	５．発行年 2017年
３．雑誌名 ヘンリー・ソロー研究論集	６．最初と最後の頁 20-32
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計8件（うち招待講演　3件／うち国際学会　5件）

１．発表者名 佐久間　みかよ
２．発表標題 トウェイン/クレメンズが読むエマソンーーホイッティア誕生祝賀スピーチのアイデンティティ
３．学会等名 日本マーク・トウェイン協会第25回全国大会（招待講演）
４．発表年 2021年

１．発表者名 佐久間　みかよ
２．発表標題 MelvilleとGlobal South:At the Hostelry”を中心に
３．学会等名 日本アメリカ文学会東京支部分科会（招待講演）
４．発表年 2021年

１．発表者名 Mikayo Sakuma
２．発表標題 What is Poem to Melville?: The Origin of Poet in Mardi and its Development
３．学会等名 12th International Conference- Melville's Bicentennial（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 Mikayo Sakuma
２．発表標題 Poetics of Atonemnt: Transformation of Xenophobia in American Renaissance
３．学会等名 The 54th ASAK International Conference（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 Mikayo　Sakuma
２．発表標題 Roots of American Theatricality: Emerson’s Lecture Space as Museum
３．学会等名 PAMLA（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 Mikayo Sakuma
２．発表標題 Emerson’s Formation of American Morality through Networking
３．学会等名 NeMLA（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 Mikayo Sakuma
２．発表標題 Melville and Dickens :Copyright and Adaption
３．学会等名 11th International Melville Confrence（国際学会）
４．発表年 2017年

１．発表者名 佐久間　みかよ
２．発表標題 アメリカ国民文学とコピーライト
３．学会等名 初期アメリカ学会
４．発表年 2017年

〔図書〕　計5件

1．著者名 佐久間みかよ（編著）	4．発行年 2023年
2．出版社 小鳥遊書房	5．総ページ数 302
3．書名 改革が作ったアメリカー初期アメリカ研究の展開	

1．著者名 佐久間みかよ	4．発行年 2021年
2．出版社 小鳥遊書房	5．総ページ数 4
3．書名 Sacvan Bercovitch アメリカの象徴を読み解くThe American Jeremiad」『脱領域・脱構築・脱半球― ―21世紀人文学のために』	

1．著者名 佐久間　みかよ（分担著）	4．発行年 2020年
2．出版社 小鳥遊書房	5．総ページ数 20
3．書名 下河辺美知子編『マニフェスト・デスティニーの時空間』	

1．著者名 佐久間　みかよ	4．発行年 2020年
2．出版社 春風社	5．総ページ数 258
3．書名 個から群衆へーアメリカ国民文学の鼓動	

１．著者名 Mikayo Sakuma	４．発行年 2017年
２．出版社 Kinseido	５．総ページ数 15
３．書名 “Emerson’s Circles and Publishing: Character and Print Culture in Nineteenth-Century American National Literature” in Thoreau in the 21st Century Perspectives from Japan	

〔産業財産権〕

〔その他〕

書評　佐久間みかよ　小倉いずみ著『トマス・フッカーとコネチカット』、『ヘンリー・ソロー研究論集』（47.48合併号）2023年2月，pp.115-118.

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関